

本土初空襲 75年

あの日、地上と空の出会い

一九四二年四月十八日の正午すぎ、米軍機が初めて東京をはじめ日本本土を襲った。B25爆撃機隊による「ドーリットル空襲」だ。歴史和解を問いつけるジャーナリストの松尾文夫さん(61)が、七十五年前、東京上空で目の当たりにした爆撃機のパイロットを米国に訪ねた。



出撃前の爆撃隊。前列右がコールさん。同左が隊長のドーリットル陸軍中佐「コールさん」提供

ドーリットル空襲 太平洋戦争開戦後の1942年4月18日、米軍が初めて行った日本本土空襲。ドーリットル陸軍中佐率いるB25爆撃機16機が千葉県の大吠崎沖1150*の洋上に浮かぶ空母「ホーネット」から出撃。最も多くの犠牲者を出した東京のほか、横浜、横須賀、名古屋、大阪、神戸など全国各都市を爆撃した。爆撃隊は機銃掃射も行い、多くの民間人を含む87人が死亡、400人以上が重軽傷を負ったとされる。ウラジオストクを目指した1機を除く15機が中国に飛び去ったが、落下傘脱出や不時着で全機が破損した。



和解の旅は続く

三月下旬、米南部テキサス州サンアントニオ郊外。松尾さんが十二年ぶりに会ったリチャード・コールさんは、足腰が多少弱っていたが、思っていたより元気だった。百一歳。一人暮らしで朝食も自分で作る。孫一人が空軍の現役パイロット、もう一人も目指しているパイロットをうれしそうに話した。

松尾さんにとって今回の訪米には格別の思いがある。日米が開戦した真珠湾攻撃への報復とされるドーリットル空襲から七十五年の節目に当たる上、かねて主張してきた、現職の米大統領による被爆地広島と、日本の首相による真珠湾の相互訪問が昨年、実現したからだ。

だが松尾さんは、いまひとつ心に落ちなかった。「安倍晋三首相の和解を訴える演説は良かったが、アジアの人々に与えた戦争被害に関する視点が抜け落ちていた」ためだ。

コールさんも、安倍首相の真珠湾訪問を「良かった」と評価しつつも、松尾さんの心を見抜いたように心配そうに漏らした。
「日本は中国とはまたちがって、いつまでか」

思い一つ



リチャード・コールさんとともにドーリットル空襲を振り返る松尾文夫さん(米テキサス州サンアントニオ郊外で)フォトジャーナリスト・山岸晶さん撮影

松尾文夫(まつお・ふみお) 1933年、東京都生まれ。学習院大卒。共同通信のパンコク支局長、ワシントン支局長、論説委員などを歴任。ベトナム戦争のサイゴン陥落やニクソン政権の米中和解などの取材を重ねた。2004年、「銃を持つ民主主義」(小学館)で日本エッセイスト・クラブ賞。近著に「アメリカと中国」(岩波書店)。

言葉響く

「鼻が高いなあ」。空襲当時、八歳だった松尾さんにとって、超低空飛行するB25爆撃機の副操縦士席に座っていたコールさんは生まれて初めて見る米国人だった。当時新宿区の戸山国民学校(現区立戸山小)三年生。帰国して母親に話すと「誰にも話してはいけない」と厳しくしかられた。

コールさんと初めて面会したのは二〇〇五年四月。出版物で当時見上げたB25に乗っていた米兵の名前が分かった。その米兵は進駐軍の一員として来日し、長年の友人だった故小林陽太郎さん(富士ゼロックス元会長)と知り合っていたことも判明。松尾さんは、その米兵、コールさんに会いに行った。

松尾さんは敗戦直前、疎開先の福井市でB29の無差別爆撃に遭い、命拾いをしていて、コールさんとの面会を望んだのは、一人の日本人として、初めて目にした米国人と和解したかったからだ。

「戦争だけがしなかったか」。コールさんは会うなり松尾さんを気遣った。このひと言で、六十年以上にわたる胸のつかえが一気に下りた。

あれから十二年。ドーリットル空襲の唯一の生き証人であるコールさんからの日中間の「とげ」に対する懸念は、松尾さんの胸にすしりと響いた。

「また会いましょう」。再会を約束した松尾さんは、歴史和解を問いつける気持ちを新たにしていた。